

東亜大学総合人間・文化学部公開講座「千夜一夜」要旨

第19話 生涯学習社会における
地域の少年教育

岡村 豊太郎 (スポーツ学研究室)

第20話 北ドイツの自然と町、
人々、暮らし

山本 達夫 (文化文明史研究室)

一. 生涯学習社会

1. 生涯学習の概念： いつでも（時間）、どこでも（空間） 内発的（動機）な学習
2. 生涯学習社会： いつ学んでも、どこで学んでも、学んだ成果が地域や職場で適正に評価される社会
3. 生涯学習（教育）出現の社会背景とその道のり： 激しい社会変化（技術革新）とこれに耐える新しい教育（学習）観（ユネスコの成人教育推進国際会議、ハッチングの「学習社会」）

二. 地域の少年教育

1. 地域の教育力の低下
 - 1) 「地域の教育力の低下」とは、2) 地域教育の威力（事例）
2. 地域の少年教育の特色： 意図的教育と無意図的教育、地域教育と態度形成
3. 地域の少年教育（団体）： 子ども会、スポーツ少年団、海洋少スポーツ少年団、ガールスカウト、ボーイスカウト
4. 子ども会活動とスポーツ少年団活動の意義と現状
5. 望ましい少年活動
 - 1) 子どもの手による活動、2) 組織と役割（子どもの役割と大人の役割）
6. 学校週5日制の活動と地域の少年教育
(平成17年9月18日実施)

ドイツの諺に「旅をすれば話の種ができる」(Wenn einer eine Reise tut, so kann er was erzählen.) というのがある。たしかに知らない土地へ行き、珍しい風物に触れれば見聞を広めることはできる。しかし単に「〇〇に行った」「〇〇を見てきた」だけでは土産話としては少々味気ないだろう。分刻みのバックツアーで名所・景勝地を駆け巡って写真は大量に撮ったものの、家に帰って「さてこれはどこだっけ？」というような旅行は空間の移動でしかない。空疎で疲れる移動へのやるせない憤懣が、せめて自分の足跡を残そうと文化遺産に名前を刻むという愚行に駆りたてるのだろうか。

旅の思い出は心の中に刻むものである。旅先の景観を外から眺めるのもいいが、現地の人びととじかに触れ合い内側からその土地を知るのがいい。筆者は昔たまたま留学生として大学町ゲティンゲンに滞在する機会を得て以来、さまざまな交友関係を通してこれまでドイツの一般家庭をしばしば訪問してきた。「ドイツ」と聞くと、風景や町並みよりも個々の友人たちの顔や彼らとの談笑が思い浮かぶ。

ドイツ人とのこうした交流の基礎は最初の留学時代に培ったものだ。滞独中、あえて日本人（社会）を避け、「旅の恥はかき捨て」を常に意識して行動した。おかげで多くの国のたくさんの人と知り合うことができたし、彼らがまたドイツ語の習得を大いに助けてくれた。言葉はやはり話せない、いや話さないと何の面白みもな